

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 7章9～17節

9この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、¹⁰大声でこう叫んだ。

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」

¹¹また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹²こう言った。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、

誉れ、力、威力が、

世々限りなくわたしたちの神にありますように、

アーメン。」

¹³すると、長老の一人がわたしに問いかけた。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか。」¹⁴そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」

¹⁵それゆえ、彼らは神の玉座の前において、

昼も夜もその神殿で神に仕える。

玉座に座っておられる方が、

この者たちの上に幕屋を張る。

¹⁶彼らは、もはや飢えることも渇くこともなく、

太陽も、どのような暑さも、

彼らを襲うことはない。

¹⁷玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、

命の水の泉へ導き、

神が彼らの目から涙をことごとく

ぬぐわれるからである。」

【福音書日課】マタイによる福音書 25章1～13節

1「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出る行く。²そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。³愚かなおとめたちは、ともし火は持っていたが、油の用意をしていなかった。⁴賢いおとめたちは、それぞれのともし火と一緒に、壺に油を入

れて持っていた。⁵ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。⁶真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。⁷そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。⁸愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。』⁹賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』¹⁰愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が到着して、用意のできている五人は、花婿と一緒に婚宴の席に入り、戸が閉められた。¹¹その後で、ほかのおとめたちも来て、『御主人様、御主人様、開けてください』と言った。¹²しかし主人は、『はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない』と答えた。¹³だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

「天にある人たち」を記念する【こども説教のために】

この日、わたしたちの教会の年に一度の「在天会員記念礼拝」に皆さんをお迎えしました。多くの教会では11月第一日曜日に「永眠者記念」、「逝去者記念」などの呼称でおこなっている、「死者」を記念する礼拝です。

かつてわたしたちの教会で共に礼拝をした仲間たち、わたしたちの家族だった者、わたしたちが人生を歩む中でかけがえのない存在だった人々。しかし今は地上の生涯を終えられ、もはやわたしたちが互いに手を触れて体温を確かめ合ったり、同じ場所の空気を感じ合ったり、一つのを分け合ったりすることができない人々。その人たちのことを、わたしたちの教会では、「在天者」＝「天にある人たち」と呼んできました。

キリスト教会でなくても、「死んだら《天国》に行く」と、多くの人が言います。亡くなった方との再会を願って、「また《天国》で会いましょう」と言う人もいます。

人は死んだら、どこかに行くのだと、わたしたちは漠然と思っているのです。けれども、本当のことを言えば、死んだ人が行くという《天国》がどこにあるのか、どのようなところなのか、知りません。だれも行ったことがないところですし、行くとしても一方通行で再び戻ってくるののできないところだからです。

わたしたちが亡くなられた方のことを「天にある人たち」とお呼びするのは、「天空」のような遠いどこかに行ってしまったと考えるからではありません。「天」は、わたしたちが「天の父」とお呼びする神の居ますところのことです。地上の歩みを終えられた人たちは、今は「神の近く、神と共にいるようにされている」と信じて、「天にある人たち」とお呼びするのです。

「天上の礼拝」の幻を見る

今日、わたしたちは、「天にある人たち」を記念しています。けれども、教会が「天にある人たち」を憶えるのは、一年に一度の記念礼拝だけではありません。毎週の主日礼拝で、わたしたちは「天にある人たち」を思い起こし、その人たちと共に礼拝にあずかっていると信じているのです。

「ヨハネの黙示録」は、ヨハネという人が信仰のゆえに捕らえられて幽閉されている中、孤独に守っていた日曜日の礼拝で見たという幻が記されています。その大半は、ヨハネが「天」に引き上げられて見ることになった「天上の礼拝」の様子描写です。

そこは、もちろん「神の居ますところ」ですから、「神の玉座」が中心に在るのです。その傍らには、「小羊」と呼ばれる者が寄り添っています。そしてまた、「長老たち」や「天使たち」が取り巻き、讃美の歌を交わしているのです。その「天上の礼拝」に、「だれにも数えきれないほどの大群衆」が加わるのを、ヨハネは見たというのです。そのおびたしい数の人々は皆、白い衣を身に着けています。ところが、その白い衣は、不思議なことに、「小羊の血で洗って白くした」ものだと言明されるのです。なぜ、その人々の衣は、「小羊の血で洗って白くした」と言われるのか。それは、彼らが「大きな苦難を通して来た者」たちだからだというのです。

もうお判りでしょう。この「白い衣を着た者たち」は、「死者」のことなのです。地上の生涯という「苦難」無くして歩み通すことのできないところを歩み終えた者たち、最後の「苦難」として「死」をも経験した者たち。その者たちが皆、「天上の礼拝」に加えられている様子を、ヨハネは見たのです。

それは、幻でした。日曜日の決まった時刻に守っていた地上の礼拝にあずかる中で見た幻でした。けれども、それは、儚くも消え去ってしまうようなものではありませんでした。ヨハネは、地上で礼拝を営むたびに、この幻を語ったのです。それを記し、すべての教会が分かち合うようになったのです。自分たち教会が日曜日ごとに営む地上の礼拝は、ヨハネが幻で見た「天上の礼拝」に共に加えられる礼拝であると、信じたからです。

「天上の礼拝」と「地上の礼拝」が一つにつながっている。そう言ってもよいでしょう。わたしたちは、そう信じ、そのように説明もします。それは、神秘的なことです。けれども、ただ神秘的なことを信じているというわけではありません。あの「白い衣を着た者たち」である「死者」が「天にある人たち」であるならば、わたしたち「生きている者たち」もまた、地上にあってなお「天にある人たち」の末席に招かれた者として生きる。それこそが、わたしたちの「地上の礼拝」が「天上の礼拝」と一つにつながられていると言うことの、もっとも大切な理由なのです。

眠りのときまで「目を覚まして」生きる

キリスト教会では、死者のことを「永眠者」とも呼んできました。「永い眠りに就いた者」という意味です。死者を記念する礼拝を「永眠者記念礼拝」と呼ぶ教会も少なくありません。死んだ者は永い眠りに就いたような状態にあると、考えられてきたのです。一般にも用いられることがあります。が、「聖書」でしばしば現れる表現ですから、ユダヤ・キリスト教の死生観だと言えるでしょう。それは、確かに、わたしたちの実感にあっています。人は穏やかに死を迎えるならば、まるで静かな眠りに落ちたような姿を見せるのです。その「永い眠り」を妨げてはいけなないと、わたしたちははずと考えるようになるでしょう。

しかし、眠りは、いつか覚めます。眠っている者は、いつか目を覚ますのです。「永い眠り」に就いた死者も、いつか目を覚ますときが来る。それが「終末」のときであると、「聖書」の世界の人々は考えていました。そのとき、「永い眠り」から起こされた者は、神の前に立たされ、「最後の審判」に臨むことになるだろうと、多くの人が考えていたのです。

主イエスも、そのような考えで人々が死者の行く末を案じていることを、ご存じでした。「十人のおとめのたとえ」は、そのような人々に向けて語られたのです。「十人のおとめ」は、「五人の賢いおとめ」と「五人の愚かなおとめ」に分けられます。「賢いおとめ」は、将来起こることに備えて準備に余念がありません。「愚かなおとめ」は、そのような準備を怠ってしまいました。ところが、「賢いおとめ」にも「愚かなおとめ」にも、眠気が襲ってきます。だれも目を覚まし続けていることはできず、眠らずにはいられません。さあ、いざというとき、起こされてどうなるかは、火を見るより明らかです。

このたとえを語られた主イエスは、「だから、あなたがたは、準備を怠らずに、今から備えておきなさい」とは、言われませんでした。「だから、目を覚ましていなさい」と言われました。皆、眠気に負けて、眠ってしまうのに、なぜでしょうか。眠ってしまってからでは、遅いからです。眠ってしまっ、いざ起こされても、「賢いおとめ」でさえ自分のことで精一杯で、他の者のことなど感けていられないのです。だから、「今、目を覚まして、為すべきことをすべてしなさい」と、主イエスは言われるのでしょうか。今ならば、自分のことだけでなく、「愚かなおとめ」のためにも働くことができるのです。今ならば、「愚かなおとめ」を「賢いおとめ」に変えることができるのです。

わたしたちは、今日、永い眠りに就いた「おとめ」たちを記念しています。この人たちは、わたしたちが「賢い」者と「愚かな」者とで永遠に分断されることのないよう、主イエスと共に「目を覚ましていなさい」とわたしたちに呼びかけてくれているのです。